

本郷先生にお世話になったこと

吹春 俊光

私がきのこの勉強をはじめたのは、1981年、大学4年になってからである。大変遅い。きのこのことは、なにも知らずに、当時教養におられた相良直彦先生の、自称弟子となった。きのこをやるには、野外の種類勉強も必要である。4回生から大学院にいたる約6年間、滋賀大学の本郷次雄先生・横山和正先生にお世話になったのである。あいまいな記憶で、なさないのだが、ちょうど滋賀大の木造校舎が新校舎になったころだったのだと思う。当時、本郷研究室の助教授であった横山先生から、3時のお茶の時間に、学生実験室の実験台にきのこを並べておけば、本郷先生は名前をつけて下さいますよ、と伺ったのである。

京都の東山の周辺、大文字や將軍塚のおもにツブラジイ林、アカマツ林で採ったきのこを、東山の峠をこえた大津市にある、滋賀大学教育学部へもっていった。東山三条から蹴上をとおり、京阪電車の線路沿いの、なんだかすすけたような道。大津から石山寺をすぎて滋賀大へと至る合計約1時間の道である。最初は50ccの中古のカブ号でかよった。今でも覚えているのだが、しばらくしたある日、本郷先生から「吹春君もきのこ採りがずいぶんうまくなりましたな～」と言われた。きっと最初のころは、非常に汚い、腐ったようなものを持って行っていたのだろう。私も、つい人に、もっと綺麗にとってきてください、と言う。自分のことを思い出すと赤面してしまう。

本郷先生の指導は大学の実験室ばかりではなかった。きのこシーズン中は月1回のペースで開催された、関西菌類談話会の観察会は、非常に貴重な勉強の機会だった。本郷先生の200種を超える新種が記載された別刷りも、私が大学を出る数ヶ月前のある日、滋賀大へ伺って、ど

っさり頂いた。私の部屋の当時助手だった、二井一禎教授から、貴重なものをいただきましたね、といわれたのも、つい最近のことのようである。いまさらに、自分の勉強ができていないことに愕然としてしまう。

9年間の長い京都の学生生活が終了した1987年4月、私は千葉の県立博物館の準備室へとうつった。それからあっという間に20年である。千葉菌と本郷先生の関わりについては、本号の会長の文章に詳しいと思うのだが、丁度、千葉の談話会が発足した1991年から10年以上、本郷先生に千葉に来ていただき、様々に直接ご指導いただいた。本郷先生は、全国のアイドル先生だった。千葉でも、本郷先生講師の観察会は、参加者が80名を越えた。観察会のあとの懇親会も1次会、2次会とつきあっていただいた。最後は必ずカラオケ屋さんだった。

私はいまだに生態屋と自称し、分類の勉強がまったく不十分なままである。そして、まだ1種しか新種を記載したことがない。はずかしい。その種は、私が修士の期間中、沖縄の西表島で2年間暮らしていたときに採集した、尿素区に発生したアンモニア菌である。当時の学力では、まったく手をつけることができず、10年以上の長い期間を経て、1995年の菌学会の雑誌に掲載された。本郷先生との、今となっては最初で最後の貴重な共著論文となった。ラテン語は全部本郷先生に完全に直していただいた。もちろん記載も、である。今でも、本郷先生の数多くのラテン語の記載は、貴重なお手本である。本郷先生の記載を解読して、そのままのかたちで、別の種類の記載をおこなうことしか、私にはできない。まったく不十分・不勉強なままである。せっかくご指導いただきながら、本郷先生、もうしわけありません。